
～ とあもの外伝～ “ 黒 ” が交わる前の虹たち

シェイド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

〜とあもの外伝〜 “黒”が交わる前の虹たち

【Nコード】

N8570R

【作者名】

シェイド

【あらすじ】

“とある異世界とある国、そこに伝わる物語”の、少し前のお話。黒虹が会おう前、彼らはどこで何をしていたのか……。短編です。

（前書き）

とあものの外伝です。読んで頂いている方用に作ったものなので、是非こちらもお願ひします。

ドサッ

「ふう、所詮ザコかよ・・・骨のないやつちゃ。」

「うわあ、師匠がやられた!!」

「いいから黙って金貨一枚よこしな。てめえらの師匠の負けだぜ。」

今回の相手は弟子をとるような男の割りに本当に大したことなかった。

これなら片手でも相手できるくらいにな。しょうしょう自慢の赤髪が散ってしまったが、その程度だ。コイツは俺に、傷一つ付けられなかった。俺は眼前で気絶している初老の男を眺めながらそう思った。

俺は細剣を腰に収めると、怯える弟子が差し出した金貨を奪い取り、あばよとだけ言って道場から出る。

つたあく、理不尽な世の中だぜ。この世の“強い”には差がある。ぎる。

背中につけたノボりに食いついてくる連中はみんなザコ。本当の強さを追い求めて修行する俺には本当に物足りねえくらいな。そのくせ戦争の時に戦うような奴らは鬼畜と思えるほど強い・・・どう修行したらお前らみたいに強くなれるんだ？

なあ神剣よ・・・お前レベルになるには、どう修行していったらいいんだ？

俺はどこまでも晴れ渡る青空を仰いで、もう一度思った。

理不尽な世の中だぜ・・・。

「ボス？」

「ん？どうした？」

「いえ、空を眺めておられたので……。」

「ああ、澄み渡る青空だ。私もこの空を大手を振って歩きたい。」

紫の長髪を風になびかせ、私は山の山頂で空を眺めていた。

クロツドの迎えにも気付かないとは……私も落ちたものだ。

「それは、国にでも雇われない限り、私たちにはムリでしょう。それはそうと、敵が攻めてきております。」

「次の相手はなんだ？」

「この前一度追いついた盗賊“ワールフ”がまた騒ぎを起こしまして……。」

「またか。分かった。すぐに行こう。」

「はい。」

クロツドは馬にまたがり、駆けていった。

私も討伐に参加しようと、愛馬を引いてまたがる。

我々義賊が、大手を振って町の中を歩ける日は来ないのだろうか？

そんなことを思いながら、馬の腹をけり、駆け始めた。

パカラッパカラッパカラッパカラッ

愛馬、^{ユーフラテス}お前も大手を振って、人々の前に出てみたくないか？

パカラッパカラッパカラッパカラッ

「ハア、ハア・・・まだ、追いかけてくるでござるか・・・？」

後ろを振り返ると、少しは撒いたようだ。助かった・・・。

この長い青髪が仇となるとは・・・人生、あまり上手く運んではくれないようでござるな。

しっかしはめられた・・・あの將軍と宰相の二人は殺すように、ロークレスには言っているでござるが・・・くそ、拙者が逃亡の身となるとは思わなんだ・・・。

それにしても、喉が渴いたでござるよ。もう数日この馬にも飲まずくわずで走らせてしまっているし、申し訳ないでござるなあ。それに空腹すぎて拙者もグロッキー状態・・・何とかならないものでござるか・・・。

「お、水だ、助かった。」

目の端に、泉が映る。馬も気付いたようで、水を求めて走り出した。そうでござるよな・・・お主もこんな迷惑な旅はゴメンでござろう？

「この水を飲み終えたら、もう祖国に帰っていいでござるよ・・・。

」

「ヒヒーン！」

「それは肯定と受け取るでござる。」

拙者としても申し訳ない気持ちでいっぱいでございますから、正直帰ってもらったほうがありがたい……。
ん？

「申し訳なく思わなくとも良いぞ。拙者は拙者、お主はお主で生き延びるためでござる。さあ、行け。」

「ヒヒーン。」

パカラッパカラッパカラッ……

「これでいい。迷惑をかけたな……さて、これからどうしようか。」

拙者は水面に映る自分の顔を見ながら、自問自答した。

「とりあえず、アリアに亡命するでござるか……。」

「む……。」

あたしは水面の自分の顔とにらめっこをしていた。何故って、いま
いちかわいい髪形じゃないから。

緑の長髪を背に流すだけ・・・これじゃ髪型とか関係ないじゃない。
でも屋敷でやるとママがせっかく切ってくれたのに悪いから、海に
来て海水とにらめっこである。

それにしても、退屈なのよね。

いつも、危ないから外に出るなってパパはそればかり。

あたしだって時空魔法と投げナイフの応用を考えたのだから野生の
魔物になんてやられないのに。

「一度くらい、旅に出たっていいじゃない。」

水面の自分に向かって問いかけた。

あたしももう、旅に出ても問題ない年のはずなのに。

「ああ、ここに居たか。」

「パパ！」

後ろからパパが歩いてきた。

「心配したぞ、どこに行ったかと思って！」

「もういい加減に子離れしたら？あたしは平気！」

「まだまだ子離れなんかするものか！」

「もう・・・ま、いつか。」

笑いながらあたしを肩車してくるパパは、やっぱり子離れできてないな。それを許しちゃうあたしも親離れできてないのかもしれないけど。

「どうだ、高いだろ？」

「うん、高い！」

いい眺めだな、高いところって。
町が一望できるや。

でもやっぱり、旅に出てみたいな・・・。

「うん、良い景色っ！」

小高いところに医院建てて正解だったなあ、町を一望できるお医者さん♪

いい土地買ったなっ。

窓からは色んな屋根やら煙突がのぞけるしっ、空気は美味しいし。
海が見えないのは残念だけど、海に行くにはもっと東かアリアに行かないとダメだからね。

それにしても、こうやって朝から毎日外を見られるのって凄く気持ち良いことだねっ。

藍色の髪をきちんと寝癖なおして、太陽に向かって・・・

「ああ〜伸びる〜ん〜ん！」

軽く伸びをして、仕事を始めようと機材を出してくると、窓の外に

鳥が飛んでいた。

「あれ？どうしたのかなっ？」

「ピー！ピー！」

カラカラ・・・

窓を開けてやると、その鳥はすぐに飛び去っていった。私は機材の準備に戻る。

「？ なんだっただろ。」

「ピー！！！」

「およ？」

振り返るとさっきの窓のふちに、鳥が二羽・・・さっきの鳥と、もう一羽は傷ついて倒れている。

「今日一番のお客さんはキミだったんだねっ。いいよ、ちょっとどいて・・・。」

すると最初に来たほうの鳥は素直に横に移る。

傷ついた鳥に手をかざしてルナを込めると、見る見るうちに治っていく・・・よし。

「これで大丈夫だよ。」

「ピー！」

「フッフ、遠慮なんかいいから、また何かあったら来なさいねっ！」

「「ピー！ピー！」」

二羽は連れ立って飛び去っていった。

私は今日、小鳥のさえずりを聞きながらお仕事することができそうです。

「ピー！」

「ピー！ピー！」

鳥か・・・。

にしてもこの腐ったルスリアの大地から早く出たいぜえ。

俺はルスリアの首都から、歩いてアリアまで帰る旅をしていた。

小鳥たちのように、飛んでアリアに帰れたら最高なのになあ・・・。

軽く風が吹き、フードが少しずれる。

目立つ橙髪を隠すため、フードを被りなおす。

「まだまだアリアまでは掛かるなあ・・・少し槍でも振るうかあ。」

背中 of 槍を取り出し、道を少し外れて鍛錬を始める。

上段の構えから、前方突き、打ち払い、退いてなぎ払い・・・

それにしても、姉貴は無事だろうか。

幼少のころから慕っていた姉貴は、もうアリアに帰ってもいないことは分かってる。

それもこれも、ルスリアの陰謀だという事は分かりきっているのだが……。

「ルスリアが憎いぜえ……俺の手で、滅亡させてやる……。」

そう思うと、鍛錬にも力が入る。そうやって道の横の草原で槍を振るっていると、馬車の音が聞こえてきた。

ゴトゴトゴトゴトゴトゴト……

ツツ、どうせどつかのお偉いさんだろう？……ルスリアの。ぶっ殺してやりてえが、さすがに馬車に乗っているような連中を殺すのはまずい。

まだ力が足りねえからな……楼剣の奴には敵わねえし。

「くそが……。」

そう思って槍を振るう。力を込めて、精一杯。

ゴトゴトゴトゴトゴトゴト……

俺の目の前を通りすぎた馬車には、貴族のジジイがふんぞり返って偉そうに座っていた。

「殺してえ……。」

悔しいながらも、黙ってやり過ごしてやった。

「いつかルスリアなんか根絶やしにしてやるからなあ……！」

過ぎ行く馬車に向かって、俺は呟いた。

ゴトゴトゴトゴトゴトゴトゴトゴトゴト……

もうそろそろお昼でしょうか？

馬車に一日中揺られているというのも疲れます……。

お父様の命令で、またアリアに軍師として力を貸すのは気が引けますね。

国王がわざわざ私の立てた軍略を打ち壊すなど……笑止です。ウェーブした金髪を撫で、思い出すのは唯一優しかったお兄様の顔。

「私は戦争なんてしたくありません……貴方もそうでしょう？お兄様……。」

ため息を一つ。

お父様は戦争好きで、私の一家はそうあるべきとお兄様たちを武者修行に送り出し、私は軍略の勉強を、ほぼ監禁状態でさせられました。

本当にお父様はいいなんなのでしょう。恨まずには居られません。

今度も、戦争には我がハーミット家が率先して参加するべきだ、と、まだ召集までずいぶん時間があるのに送り出されました。それならば貴方が最前線で戦って、死んでください。

貴方のような人さえ居なくなれば、戦争なんて起きないのですから・

。。

それにしてもお尻が痛いですね・・・クッションが欲しいです。
馬車の外を見ていると、段々細い道になってきているのが分かります。

「こういう地形は山賊に襲われやすいのですが・・・。」

私の不安をよそに、馬車は進んでいきます。

「何も無いことを祈りましょう・・・。」

そう思っていたのですが、遠からず私の不安は当たってしまいました。

でも今思えば、それがきっかけであの方と出会えたことは、人生で一番嬉しいできごとでした・・・。

時を同じくして、草原で寝転がる一人の男・・・。

グリュウウウ・・・

「おなが、すいたな・・・。」

男はそれだけ洩らすと、草のついたお尻をパンパンとはたき、のんびり川沿いに歩き出した。

後ろ姿はなんともやる気のない、ただの少年であるが・・・

黒髪をかきあげ、見えた黒い双眸には、純粹で曇りひとつない“希望”が宿っていた。

「良い世界にする、かあ。」

少年は呟き、歩く。

ザ・・・

草を踏んで歩いていく少年は、なにやら楽しそうな笑みを浮かべていた。

「よし、行くか。」

全てはここから始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8570r/>

～とあもの外伝～ “黒”が交わる前の虹たち

2011年4月21日20時26分発行